欲する者

藤川　令

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欲する者

【Ｎコード】

Ｎ７５８１Ｘ

【作者名】

藤川　令

【あらすじ】

その少年の望んだものは小さな願いだった。彼がそれを叶えるために自らを捨ててまで望んだものは……

プロローグ（前書き）

処女作品です。至らぬところは大目に見てください。

誤字・脱字がありましたら教えてくだされば幸いです。

プロローグ

赤ん坊だったある少年は、一人の赤ん坊の少女とともに捨てられた。

その後、彼らは近くにある孤児院に拾われた。

孤児院ではあったが二人は大きな幸せを感じていた。

そしてそれはずっと続くと信じていた。

だが、二人が7歳のある日、少女は名高い家の養子としてもらわれることとなった。

それは彼女が高い能力を持っていたからだ。

彼は必死に抵抗した。また、彼女も抵抗をした。

もちろん、孤児である彼らが抵抗したところでそれを防ぐことはできるはずがない。

そして、二人が離れ離れになったその日、彼は決意した。

彼女を自らの隣に取り戻すことを……

プロローグ（後書き）

なるべく毎日投稿できるようにしたいと思ってます。

今日はとりあえずプロローグの続きを投稿します。

プロローグ・2（前書き）

少年のその後です。

プロローグ・2

彼は8歳になったある日、孤児院を飛び出した。
目的地は決まっていた。
ある高名な武術家のところである。
その人は彼を受け入れてくれた。
それから彼は毎日体を鍛えた。
何があっても耐えられ、自身の敵を倒すために……
13歳になり、魔法科のある中学に通った。
彼も少女に劣るが魔法を使える。
だから彼は魔法を覚えた。
だが、彼には少女よりも魔法の才能がなかった。
いくらやっても残る成績は良くて中の下。
彼はそれを補うために理論を勉強した。
それは少女も通うであろうある有名な魔法学校に通うために……
そんな彼に神からある力を授かることになる。

これはある少年が小さな望みを叶えるために成していくことを書きつづるそんなお話……

プロローグ・2（後書き）

これでプロローグは終わりです。次回予告としては彼が出会う授かりもののお話です。

1話　彼が手にしたもの

それは突然だった。目の前に空からある少女が現れた。目を疑うほどに美しい少女は俺に対して告げた。

「助けて」

「おい、どうした！？大丈夫か？」

俺の問いかけに対し、返事は返ってこなくそのまま少女は気を失った。

「えっと…どうすればいいんだ」

何故こんな事になったのかといえば数時間前、学校から帰った俺は近くにある山へと向かった。いつもの鍛錬場所だ。そこでいつものように鍛錬をし、日が暮れてきたので帰ろうとした時のことだった。

「？」

急に空が光り、俺の元へと少女が降りてきて今の状態となった。さすがにいつまでもその場にいるわけにもいかず、近くの山小屋へと

少女を運んだ。そしてようやく少女は目を覚ました。

「大丈夫？」

「えぇ、平気」

そこで俺は大きな疑問を投げつけた。

「どうやって……いや、どうして空から降りてきたんだ？」

今の魔法では飛ぶことは出来ないということは周知に等しい。興味はあったが今は彼女がどうしてここに現れたのかを聞くのを最優先と認識した。

「私が…神だから」

「は？」

「正式にはこの世界の…ではなく、違う世界の」

この少女はまるでどこか頭の内部に損傷が見受けられるのだろうか

？と悩んだが俺の発言を待たずに彼女は言葉を続けた。

「貴方にお願いがある。私の世界を救って欲しい」

「……その質問に対して疑問があるんだけど」

「何？」

「俺にそんな力があると思う？そう見えるの？」

俺にとっては当然の質問だ。急に神と名乗る少女が出てきて、挙句の果てに世界を救ってほしい……とまで言われたのだ。疑問にならない筈がない。

「今の貴方には無い。ただ私がその為の力を授ける」

「……まぁ、仮に君が神だとしても何で俺なの？他にも強いやつがいるだろう？それに与える程の力があるならそれで救えるんじゃないのかな？まぁ出来ないからこっちに来たんだろうけど」

「そう。神は自らが造り上げた世界には干渉することはできない。基本的には見守るのが役目だから。ただ例外もあって他の世界には

その世界の神に許可さえあれば干渉出来る。何故、貴方なのか？というと貴方が望んでいたから」

「俺が？」

「力が欲しいんでしょ？」

確かに俺は力を望んでいる。それは絶対に相手を倒せ、屈伏させられる力だ

「もらえるのか？」

「貴方が私の願いを叶えるなら」

俺にはやらなければならない事がある。それをする為には彼女の申し出は願ってもいない幸運だった。その条件が彼女の願いを叶える事なら……

「なら俺は君が欲しい。すべてを屈伏させる力を」

「私も貴方が欲しい。貴方のその力が」

その日、俺は神と名乗る少女と契約した。自らの願いの為に。

1話　彼が手にしたもの（後書き）

内容が短いとは思いますがその分なるべく毎日（土日祝日以外）更新したいと思いますし、内容を長くしようと思います。

これから暇があればネタをどんどん盛り込みたいのでどうか長い目で見てやってください。

2話　二人の時

少女は指先から光を出し、それは俺の体に入っていった。入った時、とても温かく浮くような気分を感じた。

「何か感じるよね」

「うん。何かが両手にあるような感じ」

「それが力。貴方に与えたのは『真実を歪め、新たな真実に書き換える力』とそれを使える為に身体を最大限までの強化。前者の力はただすべてを歪められるわけじゃない。存在などこの世界に大きな影響を与えるものは出来ない。ただ貴方自身は既にこの世界の理から外れた存在だから貴方自身には使用できる」

「そっか。じゃあ今の俺は人外…いや、怪物か。まぁどっちも一緒だろうけど」

力を使ったわけではない。だが、彼はその力の大きさを感じ取っていた。更に身体能力を最大限まで上げられたのだ。力が無くとも最強と言えるだろう。だからこそ彼は自嘲気味に言ったのだ。自らを捨ててまで力を望み、それを手にした自分に対して。

「それで俺はどうすればいい？今すぐそっちの世界に行かなきゃならないの？」

「いや、力を授けるのにほとんどの力を使った。溜めるには１、２年使うことになるから、あちらに行くのは貴方の目的を達成するまで待つ事になるから。それでもタイムリミットを付けるなら貴方が高校を卒業したら、という事にする」

「そうか、ありがとう。それより君はこれからどうするの？」

「どうするって決まってる。貴方の近くにいる」

さすがにその答えは予想を外れすぎていた。

「えーと…どうして？」

「私は今あちらに戻れはしないし、いくら神といえど今は普通の人間より多少強い程度なのだから死ぬ事だってあるの。それなら貴方のそばにいた方が安全」

彼女の答えは簡単で至極まともな事だった。確かに今彼の元から離れたとすれば、少女は少なからず危険な状態となる。
安全度で言えば彼のそばがほぼ０％、彼から離れると５％と言って

も過言ではない。数値としてはそれほどの変動ではないが、５％というのは絶対ではない。
それがほぼ０％となるのだから、彼はそれほどまでの力を持っている事になる。

「まぁ、大体の理屈は分かったよ。なら僕のところへ来るといい」

「わかった。それと貴方は来月から魔法学校へ行くのよね？」

「うん、そうだけど君はその間どうするの？家にいるならそれでいいけど」

「なら私も同行する。その方が危険も少なそうだし」

「えっと、本気？」

「ええ、本気。あちらに戻るまでは暇だから観光気分で過ごすから」

彼女は神ゆえかこちらの世界用に作った体のスペックは最高だ。更に魔法能力も申し分ない。
それならば彼のそばにいる必要は無いのだが、今の彼女は彼に能力を与えた為、神の力は力の弱い一般人などにしか使えない。
万が一を考え、そこを彼に伝えるとしぶしぶながらも納得したよう

だった。

「俺は月下（つきした）　紅（こう）だよ。まあ、君なら分かってたと思うけど」

「ええ。私が貴方を選んだのだから。私は……そういえば名前が無い」

「あっちの名前は無いの？」

「名前は無い。呼ばれ方はいつも神様だったから。どうせなら貴方が決めてくれない？」

「んー……じゃあ、フェイトってのは？君と会えたのが俺にとって運命と言えるから」

「そう、フェイトね。気に入った」

「へぇ、神にも感情ってあるんだ。さっきからの会話ではあんまり感じなかったけど」

「ええ、初めての感情だったから表現に困ってただけ」

彼女たち神にとっては感情という概念が無い。彼女が気に入ったという感情を持ったのは彼女が自らの肉体をそういう風に作ったからである。
更にそれが彼女が彼と共に学校へ通うことを選んだ理由の一つである。

「じゃあとりあえず家に行こうか。日が暮れてきたし」

「わかった」

彼らが向かったのは山を降りてすぐの小さなアパートだった。

「狭いけど我慢してね」

「あまり気にすることではないから」

「そう？ならいいけど」

彼はアルバイトと彼の師匠だった人物の仕送りで生活している。それを合わせても生活費は少ない。だが彼にとってはそれは苦と感じるものでもなく、我慢しているわけでもない。
彼には生活に裕福さを求める感性を持ち合わせていないだけであり、

彼自身は自らが感情に乏しいのを自覚している。
だが、彼はそれを補いたいとも人となりに持ちたいとも思わない。
それが自身が自分なのだから。二人は小さなテーブルの前に座った。

「じゃあ改めてこれからよろしく、フェイト」

「よろしく、紅」

紅は軽く微笑みながら彼女を見つめた。フェイトもまた、彼に対し
会った時から変わらない無表情で見つめ返した。紅はその時彼女が
軽く微笑んだような気がした。

2話　二人の時（後書き）

次回は早速学校に移りたいと思います。

3話　スタートライン（前書き）

文章が安定しないところが少々あると思いますがそれらを見つけたら多少なりとも変更したいと思いますので
読み返して「あれ？ちょっと変わった？」的な感じになると思いますがそこは見て見ぬふりをしてください。

3話　スタートライン

入学式までの1ヶ月、紅はこの世界で必要な知識などをフェイトに教えた。魔法学校に関して彼女が言うには「それはもう対処済み」ということに。
力を使ったことは大体予想はついていたので口を出さないことにした。

「魔法は大気中にある魔素を使って形成するんだ。主に火、水、風、土、電気からなっててそれ以外は無いと言われてるよ。
ただそれから色々派生していて火なら炎、水なら氷、風なら竜巻、土なら泥、電気なら雷でこれは上級者で魔力のある人しか使えないね。
相性は水→火→風→土→電気→水てとこかな。得意魔法は一人に一つでさっき確認したけどフェイトは水だったね」

「うん」

「フェイトは魔力量も多いしあとは問題ないかな？勉強しとく所はこのくらいで。あと分からないとこがあるなら俺に聞いてくれれば答えられる範囲で教えるよ」

「分かった。今のと関係ないけど聞きたい事があるんだけど」

「何？」

「貴方はいつになったら自分自身の願いを叶えるの？せっかく力まで与えたのに」

フェイトは悩んだような表情を浮かべ、紅に問いかけた。

「へぇ、もうそんな表情を出来る様になったんだ。進歩したね」

彼の発言は彼女を馬鹿にしたものではない。事実、彼女自身もその発言に対し、嬉しいという感情を抱いた。では何故か？それは彼女が表情の出し方を知らないからだ。
最初はそれらしい表情が出来ずに1週間が経ち、やっと些細な表情を作りだした。それは自らの意思であって自然に出したものでもなく、明らかに微妙なものだった。
それらに比べると確かに進歩と言えるがあくまで無表情をベースとした小さな変化であった。

「そう？ありがとう。そうじゃなくて話を聞いているの？」

「今はまだ動く気はないよ。俺の敵は表面を叩いた所で壊れるものじゃない。だから内と外から壊そうと思ってるからまだなんだよ」

「早く願いを叶えたくはないの？」

「そりゃあ力があるなら急ぐのは当たり前だよね。でも何事にも順序はあるよ。一時の感情で動いても基本的にはマイナスにしかならない事を俺は身に染みるほど知ってるからね」

そう言って紅は隣に座っているフェイトの頭を撫でた。フェイトは度々彼が悲しそうな表情をするのを知っていた。
何かに堪えきれないような気持ちになり、何故か自分でも分からずに彼を抱き寄せていた。

「ははっ。フェイトは温かいね」

「神だから」

彼女はその時、彼の頬を伝う雫を見たのかは誰にも分からない。

1週間後、彼らのアパートから30分の所にある魔法学校『聖鳳学園』へと来ていた。

「意外と大きいんだね。人も多いし」

人数が多いのに対して、二人の周りには微妙な空間が出来ていた。
それは二人の顔立ちが良かったからだ。紅は中学時代、最初の頃は告白は毎月といってもいいほど受けていた。
彼はそれを冷めた態度で受け流していた。更にクラスとは関わらないようにしていた事もあり、すぐに告白は無くなった。それでもたまに告白はあったが…。
フェイトの方も紅が目を奪われたほどに顔立ちは良い。透き通るような白い肌、身長は１６０に満たないほどだがその身長では有り余る肉付きの良い体、細身ながらもしっかりしているプロポーション、極めつけは目を疑うほどに綺麗な銀髪。
これだけ揃っていれば皆が二人に目を向けるだろう。

「目立ってきてるし急ごうか」

「分かった」

紅がそう言うとフェイトは彼の手を掴み、軽く走り出した。明らかに逆効果なのは目に見えて分かるが、フェイトにはまだそれらの感情が宿ってはいない。
だからここで恥ずかしがるなど彼女にとっては理解しがたいものだ。

「そういうのが目立つんだけどなー」

彼は苦笑いをしながら呟くが、それは誰に聞き取られる事も無く宙に消えていった。

3話　スタートライン（後書き）

何か説明口調が多くなってますね。次回からはなるべく目線を紅よりにしてみたいと思います。しばらくは主要メンバーを増やしたらフェイト目線なども増やしたいですね。

4話　二人の協力者

4話　二人の協力者

「どうしてフェイトもこっちなの？君ならAに行けただろう？」

魔法学校というのはA～Fクラス各40人で構成されている。能力が高い順にクラスが分けられていく。
フェイトは魔法能力も高く、身体能力も高い。更に勉強は紅に教えてもらいトップクラス並みであるのだから当然Aクラス……の筈だった。

紅は魔法能力はそれほど高くない。勉強は魔法なら理論を勉強していたのだから並大抵ではないし、普通の教科も同じくらいとはいかないほどに勉強はしていたのだから悪い筈がない。

だが、ここは魔法学校だ。多少魔法が使えるからといって簡単に入学することはできないし、魔法能力さえ高ければ多少の筆記は大目に見てもらえる。

この学校は能力を優先しているのだから彼は足りない魔法能力を理論で補ってやっと合格できたのだ。
そんな彼が上位クラスにいけないのは目に見えて分かる。彼女はそれを見越し、彼と同じFに入ることを選んだ。

「駄目だった？」

「いや、こっちの方が何かと行動しやすいだろうから良い判断だったと思うよ。ありがとう」

「そう、良かった」

「立ち話しててもしょうがないから教室に入ろうか」

紅の提案に賛成し、教室の中へと入るが先ほどの様に明らかに注目を浴びる。その中から一人の幼い感じの童顔の少年が出てきた。

「ねぇねぇお二人さん。二人って何？恋人？」

「え？」

「いや、違うけど……君誰？」

「僕かい？ああ、自己紹介がまだだった。僕は如月（きさらぎ）　悠哉（ゆうや）。気軽に悠哉って呼んで」

「ん、そうか。俺は月下（つきした）　紅（こう）。俺も紅でいいから」

「私はフェイト」

「よろしく」

いままでの紅ならすぐにつき返しただろう。だが、彼もフェイトに触れ合い、少なからず変わったのだ。それも良い方向であり、彼に会ったことがある人なら必ず感じることだろう。

「それにしても紅って随分警戒してるよね。何かしたの？」

「…どういう事かな」

些細な間があったがここまでポーカーフェイスを保てたのは彼だからだろう。彼自身、あまり動揺する人間ではないのだから。

「目線が広くなってたから。明らかに気配を探ってるようなものだったよ」

「まぁ、これから3年間も過ごす人たちだからな。結構やるね、君」

「じゃあ警戒も薄くなったし改めてよろしく、紅」

「それについては悪かったよ。じゃあこちらもよろしく、悠哉」

「紅。早く座ろう」

フェイトの発言と同時に担任と思われる人物が入ってきた。３０半ばの男性だ。

「俺が今日からこのＥクラスの担任になる倉持（くらもち）　健人（けんと）だ。挨拶は面倒だから飛ばさせてもらうぞ。今からこの学校の説明をさせてもらうぞ」

倉持が言うにはこの学校は班を作り、それで学園生活を過ごすらしい。更にその班員を変更できるのは特殊な場合のみ。学内行事に参加する場合はその班だけど
学外行事、この場合は魔法の競技会などだそうだ。

「今から班を作らせるがこれに関しては別にクラスは問わない。
別にＡクラスに知り合いがいるならＥクラスの奴でも組めるが迷惑をかけたくないならオススメは同じクラスか一つ二つ上のクラスだな。
質問は……無いな。そろそろ鐘がなるからそれが鳴ったら始まりだ。
あ……言い忘れてたが勧誘時に決闘することもできるがあくまで話

し合いがまとまらない時や実力が見たい時だけだからな。忘れんなよ」

話し終えると廊下、各教室が騒がしくなった。俺はフェイトを連れ、唯一の知り合いである悠哉の所に行った。

「ちょうど良かった。僕も紅達を誘おうと思ってたんだ」

「俺もフェイトもいいけどあと一人はどうする？」

「腐れ縁の実力者がAにいるんだ。できればそいつ誘いたいんだけどいい？」

「俺はいいけど」

「私も構わない」

二人の確認を取った悠哉が二人を連れてAクラスへ向かう。道中、何度か呼び止められたがそれらは無視しているとすぐにAクラスへ着いた。

「Aクラスって結構距離あるんだね」

「結構廊下も建物も広いし意外ではないけど。あっ、いたいた」

悠哉が呼ぶとその人物はゆっくりと近づいてきておもむろに悠哉の頭を叩いた。

「ちょっ！？痛いんだけど！」

「遅い！何かいちいち勧誘うざくて困ってたんだから。……でその後ろの美男美女カップルは？」

一通りこちらの自己紹介をすると彼女は思っていた疑問を紅達にぶつけた。

「あんたたちでしょ？噂になってたよ。やばい絵になる人がいたって」

「それを言うなら貴方も絵になると思う」

意外にもそれに返答したのはフェイトだった。確かにフェイトの言うとおり彼女も黒髪ストレートが綺麗で明らかに人目をひくような顔立ちもしている。

「こいつは顔だけ。フェイトちゃんみたいに胸ないし…ぐはっ」

「いらない事は言わなくていい。私は下崎（しもざき）唯（ゆい）。よろしくね」

彼女の右ストレートが鳩尾にモロに極まり、悠哉はのた打ち回っている。

「よろしく。それより聞いていい？どうして私達の事聞かないの？Fクラスで実力だってなさそうなのに」

「悠哉の連れてきた人だし。あいつはそういうの見抜いたりするの得意だからかな？どうせ何か持ってるんでしょ？」

「否定はしない」

その時のフェイトからは楽しそうな雰囲気を感じ、無意識に自分の頬が緩むのを紅は感じた。

「そう？じゃあそれはまた今度。もう班員が決まったんだから先生に言いに行きましょう」

「あの先生、そんな事言ってなかったよね？」

「うん」

「僕達の先生大雑把そうだったから」

急に復活した悠哉の発言に三人で頷き、自己完結しているところを見て唯は置いていかれる状態になった。

「じゃあ私が行ってくるから。三人はここで待ってて」

そう言うと唯が一人でどこかへと行った。

「じゃあ僕達は決闘場でも見に行かない？強そうな人チェックしておきたいし」

「俺は構わないけど下崎はどうするの？待ってろって言ってたけど」

「気にしない気にしない。どうせ方向音痴だし当分帰ってこないよ。唯にはあとでメールしとくから」

「ならいいか。フェイト、行くよ」

「うん」

「相変わらず仲が良いね。見てるこっちが恥ずかしいよ」

「別にそんなんじゃないさ。ただ彼女は俺にとって心が許せる存在なだけだよ」

「ふーん。明らかに惚気のようなものにしか聞こえないけど」

「まあ、あんまり首を突っ込んでいいものじゃない、ってだけ言っとくかな？」

「君が言うならよっぽどだね。僕達の事を警戒してるんじゃないの？あんまり言っていい事じゃなさそうだけど」

「多少は信頼をしているって考えてくれても構わないよ。君の鋭さは結構なものだと思うし」

「そりゃどうも。そろそろどこかの試合が始まりそうだし行こう」

そのまま三人は校舎の隣にある決闘場に向かった。決闘場の広さは大体、学校にある体育館3個分くらいの広さで、
2階のギャラリーも見物しやすいように広く作られている。競技会の会場は複数ある魔法学園で行われる。これはそのために必要な広さであり、
実際はもっと人が入るため広さとしては足りないくらいである。

「今やってるのは……お！桐原やってるよ」

「桐原？誰それ？」

「紅は知らないの？新入生の中でトップクラス名高い今一番有望視されてる奴だよ！」

「へぇ。悠哉って結構そうゆうの詳しいの？」

「ハァハァ……詳しいって言うより一種のオタクよそいつは」

唯が帰ってきた。見るからに息切れしているのはここにくるまでに大分走り回ったのだろう。

「あれ？意外と早い。今日は道に迷わなかったの？」

「そ、外にある場所くらい間違うわけ無いでしょ」

悠哉は視線を桐原に向けたまま唯へ質問をした。その返答は明らかに嘘をついている様だがここで聞き返すのも失礼になるので紅は別の話題に切り替えることにした。

「そういえばオタクってどうゆう事？」

「こいつは強い奴見るとついつい調べたくなる性分なのよ。正直理解しがたいわね」

「そう？私は分かる。その気持ち」

驚くことにそれに賛同したのはフェイトだった。

「フェイトはどうして分かるの？」

「だって他人に興味を持つ理由はそうゆうのが基本だから。でも理解できるだけ。私が興味を持っているのは今は紅だけ。いえ、貴方達も入る思う」

「そう？最後の言葉は褒め言葉として受け取らせてもらうわ。でも意外ね。
あなたって周りから見ると他人に興味があるように見えないものね。あるのは自分の世界って感じかしら」

「また話が脱線してるよ？そろそろ彼について教えてくれないかな？」

紅は唯が妙に鋭い所を突いてくるのに気づき、話を元に戻した。多分彼女も他人の詮索の仕方といい、悠哉と同じ様な出来る部類に入るのだろう。

「あらそうね。じゃあも話を戻すけど彼は桐原（きりはら）貴人（たかひと）。有名な魔法使いの名家の人間、桐原財閥の御曹司様ってわけ。
そんでもって彼はそこの次男、長男は軍に所属しているって聞いたわ。ま、簡単なプロフィールとしてはこんなとこかしら」

「ちっちっち。まだ魔法能力の方が抜けてるよ。桐原の家系は主に電気……というより雷を使うんだけどその中でも桐原の血筋の人間しか使えない『雷甲冑』がすごいね」

「何だいそれは？」

「魔法で作り上げた雷の甲冑を身に纏うんだけどただ相手の攻撃を防御するだけじゃなく、相手の攻撃に対応して反撃するんだ。相性が土じゃない限りはだいたいの攻撃を反射も出来る優れものってわけ」

「へぇ、それはぜひ一度戦ってみたいね」

「いずれは戦うことになるんじゃないかな？それよりもそろそろ教室に戻ろう。どうせ彼の相手の強さなら彼も『雷甲冑』を使いそうにないしね」

「結局悠哉に連れてこられただけになったわね。じゃあ早く教室へ戻りましょ。どうせ今日は午前授業であと３０分くらいで学校も終わることだし」

悠哉と唯の言葉に二人も賛成し、教室へ戻った。更にその後はすぐに解散となり二人は家路へとついた。

「どう？学校は」

「あまり変なアクシデントがない限りは問題ないと思う。それに……」

「？」

「紅もいるから」

彼女の顔は夕日に染まって赤く照らされていた。紅はその姿を見て何も語らないまま二人は家へと着いた。

4話　二人の協力者（後書き）

当初はここでバトルシーンを入れる予定でしたが次回くらいに繰り越したいと思います。次回予告として先輩方を次回登場させます。

それと今は文章の表現方法について試行錯誤していますので多少、文章が不安定になっているかもしれませんがそこはご愛嬌ということで大目に見ていくください。

最後にフェイトとのキャラについてですがちょっと紅ルートに入りそうになってきました。作者としては少々のラブコメは入れる気ですが基本は学園系バトルを主体とした路線から脱線したくないのです。

ですのでシリアス風にそれとなく自重してフェイトについては書いていこうと思いますのでフェイトのキャラはまだミステリアス固定したいと思います。

フェイトは結構口数が少ないので色を濃くするために積極的に会話に入れてあげることを考えて書いています。

5話　オリエンテーションの始まり

朝早く起きると何やら台所で物音が聞こえてきた。様子を見てみると台所に立っていたのはフェイトだった。

「こんな時間に何をしているんだい？いつもならまだ寝てるだろ？」

「昨日唯と話をしてたら普通台所に立つのは女だって聞いたから」

「おいおい、それはあくまで世間一般の見方で別にそうじゃなきゃいけないわけじゃないよ」

「私は世間一般に慣れたいの。仮に3年後あちらに戻るにしても今は出来ること……やりたい事をしたいから」

ここ最近でフェイトは神らしさが抜け、人間らしさ出てきた。俺としてはこれから過ごすうちはそっちの方がいいけど。

「ふーん、なら食事の準備は当番制にしよう。それでいいよね？」

「うん」

彼女はそう言って軽く頷き、再び手を動かした。

「今日は様子を見るから口出しはしないよ。問題があるようなら作り方とか教えてあげるから。いい？」

「うん」

彼女があいづちを打ったのを聞き、紅は小さなテーブルに座り待つこと１０分。フェイトは出来た料理を持ってきた。
品はご飯、目玉焼き、卵焼き、それに昨日作った味噌汁といった極めてシンプルなものだった。卵料理に偏ってるがそれは今は問題ではない。

「まぁ見た目としては悪くないかな？意外と上手に出来ていると思うよ」

「そう？」

「うん。それじゃあいただきます」

そういって紅はまず安全そうな目玉焼きに手をつけた。

「ん、味もそんなに悪くないかな？焦げ目を気にしなければうまいと思うよ」

「良かった」

続いては卵焼きだけど、見た目は案外普通の卵焼きと変わらない気がするかな。でも問題は……

「ねぇフェイト。何かこの卵焼きから甘いにおいするんだけど」

「そう？砂糖が多すぎたのかもしれない」

「それじゃあ」

意を決し、それを口に放り込む。案の定、甘さに耐え切れずむせ返ってしまった。

「紅！大丈夫？おいしくなかったよね？」

「いや、砂糖の味付けをミスっただけで意外と食べられるものだよ。心配するほどじゃないから」

「それならいいんだけど」

「これからちょっとずつでも教えてあげるよ」

その代わりにフェイトの焦ったところも見れたし。

紅はそれを胸にしまい込み、フェイトと一緒に登校した。今日は班を決めてから一週間が経ち、学内オリエンテーションがある日だ。

「おはよう、お二人さん。今日の調子はどう？」

「私はまぁまぁ」

「俺もそんなとこだ。悠哉はいつにも増して元気がいいな」

「分かるかい？今日はオリエンテーション、つまりは強い先輩方の試合を生まで観戦できるんだよ！これほど素晴らしい日はないだろ？」

「まぁ君にとってはね。俺としては目立つ行動は避けるつもりだよ」

「紅の性格は知ってるよ。でもフェイトちゃんの事で結構先輩方の中で話題になってるみたいだからもう手遅れかもしれないけど。出来ることなら君の実力も見たいんだ。興味がないといえば嘘から。誘いを受けた時はぜひ見させてもらうよ」

「誘いがあったら断れないのか？」

「先輩からの誘いって受けるのが暗黙の了解ってやつになってるみたいだから無理っぽいよ。それに前に桐原の試合見た時は戦ってみたいって言ってたじゃん」

「いやそれは『雷甲冑』てのが見たかっただけなんだけど」

「そうなんだ。まぁ誘いは少なからずあるだろうから頑張ってね」

はぁ……今日は穏便に済ませたいな。

紅が心の中でそう呟いていると倉持が教室に入ってきてオリエンテーションの説明を始めた。

「聞いていると思うが今日はオリエンテーションだ。やることは一

つ、お前らの先輩方と仲良く遊ぶ……なんて生易しい事じゃなく、試合をしてもらう。
相手は2年生だ。これは個人でやってもらうことだから班でやるわけじゃない。幸いここはFクラスだ。好んでわざわざ挑みにくる奴もいるまい。
自分から挑むのは自由だからやる気があるなら手合わせをしてもらう位はやれよ。あくまでオリエンテーションだ。気楽にな」

倉持の発言にクラスの面々は明らかに嫌そうだった。まぁ当たり前といったらそれまでになる。ここはFクラス、最下級クラスだからね。
実力のある人に自ら望んで攻めていくなんて自殺行為も甚だしい。とか言う俺もあまり……というか一切やる気がしない。
さっきから悠哉は俺に向かってご愁傷様と言わんばかりに微笑みかけてくるし。

「ほら静かにしろ。特にやる気がないならオリエンテーションが終わるまで教室で静かに休んでるといい。2年生が自分から標的を探しているからここから出ないならそれにされる事はない。
ただ戦った人数を競いあってる馬鹿もたまにいるからそこは自分で何とかしろよ。話は以上だ。じゃあ頑張れよ」

そういって倉持が出ていった瞬間、授業開始の鐘が鳴った。

「どんまい紅。下手したらここまで先輩来るかもよ？」

「はぁ……まだ今日が午前授業なのが救いだよ。通常通りなら俺は逃げ切れる自信がないからね」

「まぁ頑張ってくれ。僕はこれから決闘場に行って試合を見てくるから」

目を輝かせながら悠哉はどこからか取り出したカメラ片手に走っていってしまった。

「紅」

「何？」

フェイトは袖を引っ張ると教室の勝手口を指差した。そこには明らかに群を成した2年生と思しき生徒が固まっていた。

「我はＦＣＦＣ、フェイトちゃんファンクラブなり！ここにいる月下　紅に会いに来た」

Ｆクラスの生徒は俺に憐れみの目を、あちらに残念そうな目を向けていた。

気持ちは分かる。俺に憐れみの目を向けるのも分かるけど、あんま

りあっちの人に残念そうな目を向けるのはどうかと思うよ。仮にも先輩だし。

仕方なく先輩達の群れに向かい、用件を聞いた。大体の予想はついてるけど……

「あの俺が月下ですけど……先輩は何の用ですか？」

「ふん、決まっているだろう。宣戦布告だ！我、ＦＣＦＣの会長にして月下討伐隊の隊長、２－Ｂ木村（きむら）　平次（へいじ）が決闘を申し込みに来た」

小太りの先輩は俺に指を指しながら決めポーズを決めていた。いらない部隊まで結成されてるし。

「断るのって……無理ですよね？」

「無論だ！」

そう言われ決闘場まで連れてこられた。

「決闘内容は簡単。ギブアップ、もしくは専門の審判が勝負が出来ない状態と判断した場合のみだ。更に言うならこの決闘場内には大

型魔法がかけられている。
それは死なせない為の防護結界だ。だが半殺しくらいには出来るから安心してやられるがよい」

先輩がそう言った後、審判が手を掲げた。

フェイトは多少興味有り気な顔を向けてくるしギャラリーにいるのを視認できた悠哉も同じ様な表情をしていた。
俺は見世物にするつもりはないのに……。

と多少諦めたような表情を浮かべている紅をよそに審判が手を勢いをつけて振り下げ宣言した。

「試合開始」

5話　オリエンテーションの始まり（後書き）

結局バトルシーンは次回になりました。
あと次回はまた説明が長くなるかもしれませんが我慢してくださいませ。

6話　オリエンテーションの先にあるもの

木村は先手を打とうと一瞬で紅の前に移動して、それと同時に右手に火を溜め、彼に殴りかかった。

「移動速度を上げるブースターですか。てかブースターの使用ってアリだったんですね」

そう言いながら後ろに飛びのき、その拳をきれいにかわした。

「よく反応できたな。お前の言うとおりこれは移動速度を上げるブースターだ。だが使用してもいいというルールを知らなかったお前が悪いんだぜ？
いつまでも逃げてるというわけにいかないだろ？制限時間もないんだからな」

ブースターとは空気中の魔素を補助具（型は全て指輪型）に取り込み、その力を所有者が使うというものだ。これも魔法の５元素を中心として使われている。
この場合は火、風が使われており、火で熱エネルギーを生みそれを移動用のエネルギーに変換することで速さを得ることができる。
そして風によって使用者にくる圧力を抑え、移動方向を変えるのに使用される。この場合静止から急に驚異的なスピードになる為、その圧力が大きいからである。

主にこれらの補助具は身体能力の底上げであって紅にとっては無用の長物である。
今はほとんどの競技会場で使用可能となっている。紅が知らなかったのはなるべく関わらないようにしていたからだ。

「ええそうですね。ですから今度は俺からいかせてもらいますよ」

紅はあくまで魔法を使う気はない。能力がそこまでではないからだ。そのため素手で殴りにいった。
木村は避けようとしたが紅の身体能力にかかればブースターより早く動く事は可能である。

木村は紅の拳を腹部に直接受け、後ろに飛ばされ、そのまま隣の試合コートの境目にある結界の壁にぶつかった。

「ぐっ。お前もブースター使ってるじゃないか！明らかに持ってきていない様な演技を見せられたら誰でも騙されるぞ」

まぁこの身体能力はこれだけで厄介だしばれると面倒だからそれでいいか。

「そうですよ。まぁ何を使ってるかは想像にお任せしますけど」

「別にいいさ。じゃあこちらも手加減なしでいかせてもらおう。2年のBクラスが1年のEクラスに負けたとなれば他の奴らに迷惑がかかる。それに……」

「それに？」

「それにお前がフェイトちゃんと常に一緒にいるのが気にくわない！聞いた話だと彼氏でもないらしいじゃないか！だから俺が勝ったら彼女から離れてもらおう。彼女を守れない奴に彼女は任せられない。我らFCFCがその役目を受けるのだ！」

いや、一緒に住んでる時点でそれはムリです。面倒だけどここは勝ちにいこうかな。

紅は呆れた様に突っ込んでくる木村に対し、思いっきり蹴りを加えた。
打撃音からすると肋骨を数本折れただろうが聞こえなかった事にして気にせず吹っ飛ばすと木村は激痛を感じたのか吐血した後、気を失った。

「勝者、1－E月下」

やりすぎたかな？まぁでもあれで懲りてくれればそれでいいか。

「紅。『力』は……まだ使わないんだよね？」

「うん。隠せるうちは隠したいしね」

「分かった。私もちょっとでも手助けするから」

「ありがとう」

フェイトと会話を交しながら外に出ると悠哉が待っていた。

「良い試合だったよ。でももうちょっと見てたかったかな？決めるの早すぎだよ」

「そう言わないでくれよ。なるべく目立ちたくなくて急いでたのに」

「おいおい、あれで目立つなって方が無理な話だね。ただでさえ２年のＢクラスを倒したんだぜ？しかも１年のＥが。
ギャラリーもそれなりにいたから話題にはなってる筈さ」

「憂鬱になりそうな話だね」

三人で校舎に向かっていると二人組の男女が前で立っていた。

「大体分かったわ。あなたは引き続きお願いね。」

「こいつが当たりか？」

「ええ。確かにそうみたい」

「そうか」

女は電話を切り、男の質問に答えるとこちらに向かって話しかけてきた。

「私は２－Ａ菊井（きくい）　千影（ちかげ）でこっちは同じくＡの枕木（まくらぎ）　彰（あきら）。ちょっとついてきてもらってもいいかな？他の二人も一緒でいいから」

これって明らかに俺に言ってるみたいだよね。はぁ……

心の中でため息を吐くとそれを表情に出さないように返答した。

「えぇ、分かりました。ついていくだけなら」

「そう、良かったわ。じゃあこっちよ」

そう言われついていくと校舎3階にある一番端の教室、生徒会室に連れてこられた。コンコンと軽くノックをし、枕木先輩が扉を開けた。

枕木達の視線の先を見ると幼げな顔立ちながらどこか凛とした雰囲気を持った人がいた。

「会長。連れてきました」

「ありがとう、枕木くん。えっとそれじゃあ先に自己紹介しようかな？私は3－Aの東雲（しののめ）　雀（すずめ）。
会長でも東雲先輩でもすずちゃんでも好きに呼んでね」

それを聞き、入学するにあたって多少聞いた事のある目の前にいる人物の噂のことを思い出した。
東雲　雀、名家の東雲家の出身で使う属性は水。今のこの高校でのナンバーワンだった筈。そういえば東雲家の技は聞いてないな。

とそこまで考えた後は自己紹介をした。

「俺は月下　紅です」

「そちらのお二人は？」

「私はフェイト」

「僕は如月　悠哉です。そ、それより東雲先輩って東雲家の出身ってことは『自氷結離』使えるんですよね？」

目を光らせながら質問する悠哉を他所に、そんな名前だったんだ……と横で考えていると答えを濁らせながらも会長は答えた。

「そうですよ。よく知ってますね。なるべく情報は表に出してない筈なんだけどな」

などと軽い感じで受け流して話しながら本題へと移った。

「えっとですね、紅くん……だよね？2年生のBクラスの子を倒したのって」

そこまで聞き、紅はここまで呼ばれた内容が理解できた。

「ええまぁ。あちらもFということでかなり油断してくれてたみたいですね。
ブースターを使って奇襲攻撃仕掛けてみたら意表をついたみたいで一発で終わっちゃいましたよ。
でもそうゆうのが効くのって所詮1回目だけですから実力とは関係ないと思いますよ？」

この会長はおそらく1年生の中で2年の上位クラスに勝った1年生を生徒会及びそれらしいものに勧誘しそうなのは目に見えて分かってた。
この高校は部活に所属すると生徒会やその他の特殊な委員会に所属することが出来ない為、事前に勧誘すると悠哉に教えられた。
だから紅はその話を切り出させない為にこの時の決闘で自らにかなりの利があったということを事前に知らせ、偶然を装って見せた。
というよりそれ以外、声をかけられる理由がないしね。……と心で呟き、相手の出方を待つ。
先に口を開いたのは菊井だった。

「だそうですよ。あまり1年生に期待を持たせたり、過剰に期待するのは潰すことと一緒ですよ」

「……そうならいいです。ごめんね、紅くん。わざわざこんなとこまで呼び出しちゃって。お詫びに今度デートでも連れてってあげま

すから」

「いえ、俺じゃ学園のアイドルの会長とは釣り合いそうにありませんから。それじゃあ失礼します」

「そう、残念です。ではまた今度」

会長にそう告げると二人とアイコンタクトをし、さっさと生徒会室をでた。

「紅やるね。話を切り出させないタイミングが上手すぎだよ。僕なら少なくとも狼狽くらいはしてたよ」

「そんな事ないさ。ただ本当のことを言ったまでだよ」

「ううん、私から見てもあの話術は凄いと思った」

「そう？褒め言葉として受け取るよ、フェイト」

「うん」

と話している一方で……

「あの子……やっぱり欲しいですね」

その呟きを聞きとった菊井が素朴な疑問を投げつけた。

「なぜです？確かに２－Ｂの生徒に勝ちましたけど明らかに彼の言うとおりマグレ、と受け取るのが妥当だと思いますけど。補助具を使えば誰だってマグレで勝つなんて出来ますよ。現に受けた報告だと２－Ｂの生徒も彼がブースターを使用出来たのを知らない様子だったそうでしたし。更に言えば審判もブースターの複数所持等の確認を怠ってしまっていたと言ってますし、彼が奇襲によって勝っても何も問題はないと思うんですけど」

そこまで告げた菊井に対し、会長は首を横に振った。

「彼はブースターなど所持していない筈ですよ？だって彼は指に補助具を着けてませんでしたから。更に言えば使用後に１日経たないと消えない筈の使用痕は指に残ってませんでしたから。おそらく彼は補助具を使わない人ですよ。頑張って指を隠してたみたいですけど全ての指を確認しましたよ」

さすがのその場にいた二人にはそのようなことを考えている様には

見えず、多少驚いたが東雲　雀という人物を知っているからこそその後は冷静を保った。

「では会長はまだ諦めずに勧誘するつもりですか？やるなら俺も微力ながら手伝いますよ？」

枕木はまるで悪戯を始める前の子供のような表情を浮かべる会長に対し、同じ様な表情をしながら聞いてみた。

「ええ。その時はよろしくお願いしますね」

それを見た菊井は心の中で紅達に手を合わせていた。彼らはそうとは知らず、教室で他愛も無い話を繰り広げていた。

7話　会長の特権

朝、目が覚めた私はいつものように顔を洗った。その後朝食を食べ、学校へと向かう為の準備を始めた。
それを終えると表に停めてある送迎用の車へと乗り込んだ。何度乗っても変わらないほど綺麗な内装が施されている。
この車はそれだけではなく、性能もかなり良い。揺れを感じさせない走りを続け、私の通う聖鳳学園へと着いた。
割と早い時間に来たにもかかわらず、ちらほらと少なからず生徒が歩いていた。

「おはようございます。会長」

「東雲先輩！おはようございます！」

と私に向かって言われた挨拶に返事をしながら目的の生徒会室を目指す。
お目当ての扉を開けるともう既に一人の女生徒が立っていた。

「おはよう、菊ちゃん」

「その呼び方はやめてください。会長」

「いいじゃない。可愛いでしょ？菊ちゃんって」

「一切可愛くありません」

せっかく綺麗な顔してるのに……と怒った表情を浮かべる彼女を見ながら思っていると話題を変えようとしたのか別の話を振ってきた。

「結局あのＦクラスの１年生はどうするんです？もう一人は確保してるんですから無難にＡクラスの生徒でも誘えばいいじゃないですか。
身体能力が高くとも魔法が弱いからＦクラスにいたんですから」

「何を言ってるんですか！女なら一度くらい考えませんか？」

「何をですか？」

不思議そうな表情をする彼女に当然と言わんばかりに一つの答えをぶつけた。

「カッコ可愛い男の子を周りにはべらせたいじゃない！イケメンの年下なんてもう最高よ！」

「……会長。今まで結構な付き合いでしたけどここまで呆れたのは初めてですよ」

「あら、そこまで褒めてくれるの？」

「そうじゃありません！私は今、会長を褒めたのではなく罵倒したんです」

「えー。だって強くてカッコイイなんて最高じゃない」

「で結局言いたいの欲しいってことですか？」

「あら話が早いですね。ですから次はこちらから手を打たせてもらおうと思うんですけど」

「はぁ、分かりました。それで何をすればいいんですか？」

「それは……」

〜〜〜紅〜〜〜

「フェイト達っていつもお弁当よね。どっちが作ってるの？」

俺達はいつもの様に班のメンバーで昼食を食べていた。

「交代制。毎日紅と交換して作ってる。今日は紅」

二人にはフェイトは親戚、ということにして共に暮らしていることを教えていた。言いふらされるのはごめんだけど……

「へぇ。一つもらってもいいかしら？」

「いいよ」

「僕も」

「ほら、悠哉はこっち。あんまりフェイトから取ったら量が少なくなるからね」

そういって二人は定番の卵焼きを取り、口へと入れた。

「うまっ！何これ？普通卵焼きなんて誰が作っても同じじゃないの？初めて僕、卵焼きを大好きのカテゴリーに入れたよ」

「それはダシの取り方かな？ちょっと工夫してるんだけど」

「さすがに美味すぎるわね。月下くんってこの調子だと何でもできそうね」

「顔良し、頭良し、運動良し、家事良しとかどこの超人？」

「そんな事ないよ。それだけあったって誰かを助けられるかい？」

「そう言われると答えられないけど。それって関係ないじゃない？」

「まぁそれもそうだね」

ついつまらない事言っちゃったかな？

「ちなみにフェイトはどれくらい出来るの？」

「私は紅に習ってる途中だから」

「結構意外だね。フェイトちゃんも出来そうなイメージだけど」

「そんな事ない。結局は何も出来ないから」

そんな会話をしていると急に校内放送が入った。

『え～と１－Ｆ月下くん、月下　紅くん。誰でもいいので彼を生徒会室まで連れてきてください』

「？」

四人でクエスチョンマークを挙げるのを他所に放送は続いた。

『それで彼を連れてきてくれた人には私から頬にキスしてあげますよ！あっ、ちなみに彼が一人で来た時は彼にもっといいご褒美あげますけど』

「どういう……事？」

隣で悠哉が間の抜けた声を上げる。正直、俺もそんな声が出そうになった。

『ちゃんと生徒会長権限で学校からも許可はもらってますから紅くんの抗議はこっちに来てから聞きますね。それじゃあヨーイ……』

頭が混乱しそうになる中で無情にもその声は学校に響いた。

『始め！！』

7話　会長の特権（後書き）

今回はずいぶん短くなっちゃいました。

ですので次回は週明けでもあるので長く書きたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7581x/

欲する者

2011年10月28日14時04分発行